

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(每月一回一日發行)
昭和二十二年一月廿日印刷納本昭和二十二年二月一日發行

第十三卷

第二號

淨土

二月號



法然上人鑽仰會發行



日本佛教の課題

英國進駐軍少佐

ジョン・ブリンクレー

ジョン・ブリンクレー少佐、彼こそ日本に生れ日本にそだち日本を深く愛し、愛したればこそ、狂暴な軍部に自由をうばわれ、勝目のない戦争に突入した不幸な日本を、一日も早く彼等の手から解きはなとうと、母國英國軍の參謀となつて神經戦を司り、ビルマ遠征の日本軍の指揮系統をみだして、その潰走を早からしめた話題の人である。目下東京裁判の検事局に勤務し繁忙な日をおくつてゐるが、過日、築地本願寺ではじめてビルマ戦當時の活躍を語り日本復興の道を説いた。記者は少佐としんみり語る機會を得たが、以下はその要旨である。

私が愛する日本をはなれたのは昭和十七年三月三十一日であつた。商科大學、大正大學、成溪高校の教職を追われはしたが、他の英米人のようはひどい迫害にもあわなかつたので日本に止まらうと思つたが、親しい日本の友人から「君こそ國籍を利用して英國軍にはいり、日本軍閥崩壊のために働いてくれ」と懇願された。私は當時の日本にかゝる友人を見出したことを喜び、深く決意した。偶々英本國からすゝめられたので、急ぎ印度の東南アジア司令部へ行つた。日本軍への

神經戦が私の仕事である。日本の雜誌新聞は思うように手に入つたので、仕事は面白いほど効を奏したが、私の心をくらくしたのはあちこちからはいる日本軍の慘虐行爲である。私は明治の將軍、大山、兒玉、野津、黒木などを知つてゐるが彼等は實に物分りがよく、日露戦争ではかゝる慘虐行爲を敢てしなかつた。彼等はいゝ意味の日本の教養を身につけ、近代を研究し時世をよく學んでゐた。現在の東條以下の軍閥の暴虐な行爲を想うと私は日本のために泣いた。

かつて日本滞在中、友人の軍人に「英米と戦つても勝目はない」と忠告したことがあるが、彼は「英米は戦争をスポーツと見てゐるが、日本は命を賭して戦うから必ず勝つ」と傲然と放言した。しかし、精神的ゆとりがなくてなんで勝てよう。しかも血にうえた彼等軍閥は僅か二十年間に有能な社會指導者を六十名以上も殺してゐる。これでどうして勝てるか偶々東條が英米の旗をふみにじつてゐる寫眞が手にはいつた。私は快哉を叫んで直ちに利用した。全く日本の軍閥は狂亂の眞唯中にいたのだ。

二

かゝる慘虐行爲が次々に傳わる中に、たゞ一つ私を喜ばせてくれたニュースがはいつた。それは日本に捕われたオラン

ダ人から聞いた話である。

ジャワの日本の收容所も例にもれず、病人には薬も水も與えないという冷遇ぶりであつたが、不思議なことが毎晩行われた。人が寢靜まつた夜半に、こつそり一人の兵隊がはいつてきて、熱にうかされてゐる病人に水を與えたり薬を飲ましたりするのである。一晩や二晩だけではなく毎晩である。しかも名前も告げず、風の如く來て風の如く去るのである。人道を無視した残酷な日本人のみを眺めて來た者には、全く奇異な出來事であつた。收容所では彼の話題で賑つた。或る晩のこと、水を病人に飲ましてゐる彼の側に行つて、正體をたしかめようと、懷中電燈を照らした。ボロボロの服をきて、襟には二つ星がつけられてあつた。片言まじりの土語で話しかけたが、意はどうか通じた。病人の苦しみが見ておれず少いながらも自分の手にはいる薬を與えてゐるのだが、夜半監視の目を盗んでやつてくるので、充分の介抱ができず残念であると言つたが、收容所員一同で感謝の意を表したいから名前を知らしてくれと懇願しても、當然のことをしたただけで名前をあかす必要はありませんと謙虚に拒絶した。みんなその床しい態度にうたれたが、別れぎわに彼はポケットから珠數をとり出して「私はこれです」と言ひすて、逃げるように部屋を出ていつた。彼が佛教の坊さんであることはこれで分つたが、佛教が立派な宗教であることを、身を以て示してくれて有難かつた。その後も彼の眞夜の看護は日本兵の監視の目をのがれて続けられたが、何時ともなく彼の姿が見えなくなつた。みんなはどうしたのかと頻りに案じ、或日、將校に彼の消息を聞くと、

「いや、奴は日本の坊主だが、我々の監視の目をくゞつて勝手なことをやりおつた。情にもろくしてしようがないので、

他に移したわい」

との冷たい答えた。みんなは淋しい氣持になつたが、それだけ彼の溫かい心が一そう思ひ出されて、激しい愛慕の情にひたつた。

三

この話は我々の間に非常な感激をまきおこした。日本兵の中にも、こんな人道的な溫かい心の持主がある。日本人全部が悪いのではない。日本人にも希望が持てると思ふと同時に彼を感化した佛教の平和的な慈悲の教えが注目の的となつた。佛教の研究が我々の間に急に壯んになり、私などは佛教を生かじりしてゐるところから、あちこちでひつぱり風にされる始末だつた。しかし研究が進むにつれて、こんな平和的な戦争を否定してゐる佛教に育てられた日本人が、どうして戦争をひきおこし、あんな慘虐な行爲を敢てするのか、という疑問は深まるばかりで、ますます日本人が分らなくなつた。私はいろいろ考へた結果、それは佛教が眞に社會的に進出してゐない爲だと斷定した。佛教の尊い教えが寺院の中に止まり、ひろく民衆の中に滲透してゐない爲だと結論した。即ち文化や美術の部面では相當に貢獻してゐるが、歐米のキリスト教のように社會化してゐないのである。しかし、私はキリスト教は社會的にはかなりの勢力を有してゐるが、思想的には既に發展の餘地をのこしてゐないと思ふ。それに反して佛教は深い思想を有し、未來性を多分にふくんでゐる。私は佛教の將來性をかゝる意味から高く買つてゐる。佛教の興隆はこれからである。

佛教を日本に生かすことによつて、はじめて日本は文化國家、平和國家になり得るのである。日本の復興は實に佛教によつて實現されるものである。(新かな遣い使用)

バラ色の光

カサハラシン

或貧乏な家で子供が死にました。その子は哲雄と言ひました。哲雄は素直な善い子供でした。白い布を顔に覆せた枕元でお母さんが一人ションボリと坐つてゐました。

哲雄の魂は今、月夜のやうな蒼い光の中を風に吹かれながら、たつた一人で歩いてゐました。あたりは裸の岩山で所々に枯れ木が立つてゐました。

哲雄は淋しくて心細くて何ともやり切れない氣持でした。風は歩く度毎に着物をあふり耳元をヒュー／＼言ひながら吹き抜けました。かじかんだ手を口の邊へ持つてきてハハと息で温めながら、ブル／＼ふるへて魂は歩いてゐるのです。

「おゝ間に合つてよかつた。御めんね、哲雄ちゃん、お迎へがおそくなつて」
突然耳元でかう云ふ人がありました。

「……………」
眼を上げて見るとフワフワした着物をヒラ／＼風になびかせて手に長い杖を持った人が

ニコ／＼笑ひながら立つてゐました。その人は哲雄の眼をのぞき込むやうにしながら云つたのでした。

「さあ之からおぢさんが一緒に行つてやるから恐いことも淋しいこともないよ」

「……………」

然しその人の眼を見てゐると、何か温い呼氣のやうなものが身體をフンワリと包むやうに思ひました。

「どうしたんだい、そんな不思議さうな顔をして？」その人は相變らずニコ／＼しながら訊きました。「可哀さうにな、こんな岩山を裸足で歩いて……さあ手を引いてやろう」その人はかう言つて大きな温い手で哲雄の冷えきつた小さな手をにぎりしました。

「此の岩山を越えると風も吹かなくなるし、もつと暖かになるよ……」

かうして哲雄は親切なおぢさんに連れられて一步一步けはしい岩山を昇つてゆきました。とう／＼頂上に着きました。すると其處

宗教と世界平和

小崎道雄

(日本キリスト教團統理理事長)

信仰は生活の原動力である。

歐米ではキリスト教徒の政治への進出が著るしく、殊に戦後キリスト教政黨の活躍が目覺ましい。彼等は信者を牧するだけに満足せず、街頭に立ち、社會にとびこんで、キリスト教の信仰によつて社會を淨化せんとしてゐる。しかも宗教の力によつて戦争を防止し得なかつた責任を感じて、贖罪の念をもつて戦後の建設に挺身してゐる。信仰が生活を動かしてゐるのである。

然るに日本では信仰は日常生活の中に生かされず、青年は殆んど無宗教である。苦しい時の神だのみで、日本人には煩悶や逆境の時に神にすがる傾向があるが、これは邪教のくいこむすきを興えるだけで、正しい信仰ではない。生活そのものの中に生きてゐる命こそ信仰である。

から哲雄が住んでゐた街が見えました。家も見えました。家の中でお母さんが眼を泣き腫らして、シヨンボリ坐つてゐるのも見えませんでした。

「お母さん」出来るだけ大きな聲で呼んで見ました。然し聞えないのか、お母さんはやっぱり下を向いて、涙がボタ／＼と膝の上にたれてゐました。

「お母さん」もう一邊呼んで見ました。すると、ギョツとした様子で一寸と顔を上げましたが、首を振つて又すぐ顔を下に向けて前より一層激しく泣くのでした。

「さあ行かう、いつ迄呼んでも同じことだ」親切なおぢさんはそばから言ひました。

二人は段々岩山を降りてゆきました。すると家も街も見えなくなつて、蒼い光の中で上から見下してゐる親切なおぢさんの眼だけが優しくまたゝいてゐました。

「おぢさん！」

「何だい？」

「おぢさん」

「淋しいか……よしよし今に、にぎやかな暖い國へ連れてつてやるよ、ホラ其の國の子供に持つて行つてやるお土産が出来た」かう云つておぢさんは何か白いものを拾ひ上げました。

「白だ！」

「さうだよ、よく覚えてゐたな、お前が助けてやつた仔犬だよ、いいお土産だ、きつと皆が喜ぶよ」

風が再び強くなり、哲雄はおぢさんの陰にかくれるやうにして歩きました。蒼い光の中で岩も枯木も、おぢさんの顔さへ夢の中のものやうに見えました。

「ホラ又あつた」かう云つておぢさんは今度は小さな光るものを拾ひ上げました。

「覚えてゐるかい」

哲雄が手にとつて見ますと、黄金のやうにピカ／＼光る重い十錢玉でした。

「……………」

「忘れたのかい、餘程前のことだからな。お前隣の義一に十錢やつたことがあるだろう、お使のお金落して困つて泣いてゐた子な、あれはお前がお母さんから貰つた、たつた一つの十錢玉だつたな……ホラそれだよ」

おぢさんはとても嬉しさに言ひました。

「僕貧乏だつた、もつとやりたかつたんだけど……」

「十錢玉だつて時には何萬圓より尊いことがあるよ——サア、明るい暖い子供の國が近づいた、向ふを見て御覽」

見ると向ふの山蔭にバラ色の暖さうな光が空に映つてゐました。道も平に歩きよくなりました。バラ色の光は段々強く美しくなり、あたりも夜明のやうに明るくなりました。

親切なおぢさんは誰ですつて？

それはお地藏さまと言ひます。(終)

明治初年以來、歐米の物質文明に目がくらみ、その吸收模倣に急であつた。八十年の歴史が物語るやうに、物質文明はかなり進歩した。世界的學者も出た。しかし宗教が裏うちされてゐることを見失ひ、精神的文化を閑却したので、明治以來の教育は宗教を輕蔑し排撃するやうになつた。この結果、力は正義なりという考へが、國民の中に生じ、神も佛も恐れぬ傲慢な精神をいだくやうになつた。誤れる今次大戦をひきおこした源は、實にこの國民の宗教を見失つた獨善的な精神にあるのである。

日本人が世界に貢獻する道は、數多くあるであろうが、最も重要なことは、世界平和の爲に立上ることだ、これこそ世界から認められる早道である。この爲には八千萬の人々が正しい信仰をいだかねばならない。神佛をあがめ、神佛を恐れ、神佛に従ふ嚴肅なる信仰によつてのみ、眞の世界平和はもたらされるものだからである。

今こそ信仰を日常生活の中に生かす時である。

信仰相談

どうすれば信仰にはいれるか

擔當 中村 辨 康

(問)

私はしきりに信仰を求め
ては居りますがちつとも
信仰にはいれません。どうすれば
信仰を獲られませうか。念佛すれ
ばよいとも教へられましたので、
念佛しますけれども入信したやう
な自覺はありません。どうぞお懇
ろに御教授下さいまし。(千葉木更
津・煩悶生)

(答)

お察しますと精神上の一
轉回をハツキリ認めたい
と念願して居られるやうですが、
然しそれは誠にむつかしいことで
ありまして誰にも出来るかと云ふわ
けではありません。またそれを期
待して念佛せらるるやうでは念佛
が念佛になつて居りませんから駄
目でございます。五蓋と云つて
五つの邪魔になる蓋があつてはそ

の信仰上の入れ物は開かないと云
はれて居ります。五蓋とは貪瞋痴
の三とそれに昏沈と掉舉との二つ
を加へます。「貪」はむさぼりで、
何か證據を得たいと思ふ心「瞋」は
腹立ちで、いくらやつても駄目だ
と腹を立てること「痴」は私のや
うなものは駄目だと自分を自分で
殺して居ること「昏沈」とは氣が
沈んでお念佛に勇みがないこと、
「掉舉」とは氣が浮き／＼し過ぎて
落付がないことであります。こん
な氣持が起きましたら一心に懺悔
してもつと／＼發願心が強く起る
やうに如來様へ念願するのがよい
と云はれます。これ等も信仰の邪
魔ですが、疑問があるのもいけま
せん。始めはさう大した疑問もな
いやうですが、念佛したり信仰書

を読んだりして居る内に段々疑問
が出てまいりますから、それを一
つ一つ書きとめて置いてこの欄へ
でもお質ね下さい。それらを段々
解決して行きますと、段々高い信
仰へ導かれて行きます。そこで一
二年もたつてからあとをふりかへ
つて見ますと、なる程自分も何時
の間にか信仰に導かれて居たこと
が判然とします。これは漸進的な
ものですが、先づ萬人に通ずるも
のと存じます。急激に變化が起る
のは一見あざやかなやうには見え

ますが、兎もすれば信仰がむらで
あつて逆縁に遇ふと退轉する恐れ
さへあります。あせらずしかも屈
せず一心に念佛して下さい。念佛
して見たが駄目だつたと云ふのは
念佛を試して居るのですから、念
佛ではなかつたのです。念佛とは
一心に阿彌陀佛に歸命すること
です。その外の要求があつてはなり
ません。要求なくして一心に念佛
するところに既に信仰が成り立つ
て居るのであります。

浄土存在に就て

谷山忠謙氏に答ふ

御書面の中に「中村先生の仰し
と云ふ哲學的解釋ではむしろ學問
やる唯の存在でなく時間的變化だ
としてではなく宗教的情操を培ふ

上に於て聊か固苦しいところもあるやうですが、何しろ阿彌陀佛の存在にしても、存在の道理を分らうとするのは智慧を磨くのと智慧を増すのとの相違を辨へぬ無駄足を踏む智慧のない不經濟な非能率的な非文化的な信仰でせう」とあり、また「私自身がどうしても道理をわからうとばかり心焦つて道理を捨て切れなのです。道理なるものが既に自我から出たものではないかと思考するのですが、どうか中村先生其他の先生方の御指導を頂きたいと存じます」とありましたので、左に御答へ致します。

夏祭に四五十人の若い人達が神輿をかついで渡御を致します時、初めは皆な気が揃つて居りますから肅々として正しく歩いて居りますが、段々熱して来るに従つて神輿は個々の人々の心に背いて思ひも寄らぬ行動を取り初めあちこちによるめき歩くやうになり容易に本殿に入らうとせず、逆戻りしたり横の通りに入つたりします。

さうなるとかついで居る人達にあだかも神が左右して居るやうな神秘感が起つて一層夢中になるのがあります。

これは人々別々な心の動きの中に或る小さな心の動きが共通する時、その共通する心は個々には氣のつかぬ程のものであつても総合されれば大きな動きになつて、個々の人々の心に思はないやうな行動を取るようになるから、それを人々は「神の御心なり」と受取つて愈々益々神秘感を助長させるのであります。これは單に四五十人位の綜合意志でありますが、宗教的には神の意志として受取れるのであります。今ま淨土教に云ふところの「阿彌陀佛」はこの綜合意志の絶大なるものであり、宇宙大のものでもありますから「無量壽」であり「無量光」であり「無量相」であり「無量幢」であり「無量衆」であるわけです。だからこそ唯だの存在ではないのです。かう云ふとそんな理窟では宗教情操は培はれないと仰しやるでせう。ご尤もです。理論では感情は養はれませんが、むしろ理論で感情がこわれる

場合が相當多いです。然しながら逆に理論的に納得出来ない爲に宗教情操の起るのを阻害して居る場合も相當に多いことを考慮すべきであります。但し宗教情操を養ふには養ふべき方法があります。それが即ち淨土宗に云ふ五種（六種）正行であります。即ち讀誦し觀察し禮拜し稱名し讚嘆し供養すること、に依て段々に養はれるものですが、最も直接的なものは何と云つても念佛唱名が第一で、念佛すること、に依て漸次に情操が培はれるのであります。

次に道理の捨て切れなものは當り前のことで、これを無理に捨てやうとするのは無理であります。即ち讀誦觀察等の行も理解の一種であります。また一枚起請文の「一代の法をよく／＼學すとも」と云つて居るのは「學問するな」と云ふことではなくして、一切經を勉強しても念佛する時は一心になつて念佛せよと云ふことであります。學問してもなま知りの學問にこだはるなと云ふことです。

それから「存在」と云ふことが問題のやうですが、前にも度々言つたことがあるやうに、佛教では存在を「有」と云つて「迷ひ」であるとして居るのです。物が存在

するやうに淨土があり佛があるならば、それこそ「迷ひ」でありますし、それでなければ信ぜられないうならばそれは正しく「迷信」を主張するもので、むしろ不淨說法の一種でもあるわけです。また「有」は三界のことと「佛界」のこととはありません。迷故三界城悟故十方空と云ひます。空とは「自由自在」と云ふことであり、城とは牢獄のこととあります。ですから若し淨土が存在ならば牢獄であり繫縛であつて悟界でもなく涅槃界でもないことになります。お分りにはなりますまいか。

信仰相談について

本誌の信仰相談は中村先生の懇切な解答により毎號好評を博してあります。左の規定によりふるつて質疑をお寄せ下さい。

規定

- 一、用紙……官製はがき
- 一、宛名……法然上人續仰會
- 一、内容……淨土宗の信仰に關する問題ならなんでも結構です。

讀者諸彦へ

お願ひ

事務所

復興第一號三月號が編輯されたのは昭和廿年の十二月の頃で、壹部金五拾錢（送料五錢）ならばやつて行けると思はれて居たので、定價五十錢で市場へ日配を通じて出しましたが、第二號（四月號）の頃は物價が騰貴しましたが定價一圓二十錢（送料五錢）年額金拾五圓ならばまかなへると考へ、そのやうに願ひいたしました。それで約六百人程會員（今では漸く千二百名位）が出来ましたが、事務所及び編輯部員が辭任を申し出ましたので、五月號は遂に休刊の止むなきに至り、六七合併號を第十二卷第三號として出すこととし一部金壹圓六十錢（送料は十五錢）壹年分は二十一圓となりますけれ

どもお金の都合を考へて送料共金二十圓と云ふことにし、續いて七八合併號を出しました。然るに第三種の規定は年に三回以上休刊することは出来ないのですが、もう既に三回休刊（合併號は一月休刊と見做されます）となつたので選信局からは第三種を取消すぞと叱られるやら、また一方には紙の配給がないのでとにかくと思つて紙を若干高値で買入れるやら、色々苦難な事情もありましたが、漸く十月號を十二月に出し、本年一月になつて十一月號が出来ました。ところがその時印刷所の方でもう紙が足りなくて少し立替へたと云ふ申入れがあり、こちらの計算ではまだ十四連位ストックになつて居なければならぬから、調べましたところ、以前の編輯員と倉庫係との間に話の喰ひ違ひがあつてよく判明しません故、思ひ切つて印刷所を變更することに致しました爲に、段々發行がおくれ三月にな

つて漸く十二月號と一月號とを出した始末でございます。それも極度のインフレに頁數を半減しなれば採算が取れないので讀者には申譯ありませんが、減頁して漸く年二十圓の値段を維持しやうとしたのであります。然かもその印刷の紙は共立社で貸して貰つて發行したのでした。ところが四月の各種の選舉と教科書の方へ廻す紙とで、紙代はお話にならぬ程の騰貴を來たしたばかりでなく、容易のことでは現物も手に入らぬのです。此上年二十圓でやつて行くなれば宗務所の補助がもつとありましても廢刊しなければなりませんので止むを得ずまたまた一部金參圓送料五拾錢で一ケ年は四拾貳圓と云ふことに値上げを致しました。かう云ふ譯ですから何うか折角の「浄土」を救つて下さる意味で今度の値上げも御許るし下さい。従つて誌代は二月號からそう云ふ計算に致します故何分よろしく御願ひいたします。

「浄土」 二月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿二年 一月二十日印刷

昭和廿二年 二月 一日發行

(定價三圓)

東京都芝區芝公園淨土宗務所

編集兼 眞野 正 順

發行人

印刷人 春山 治部左衛門

東京都神田區神保町三ノ一〇

印刷所 共立社印刷所

配給元

東京都神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園淨土宗務所

振替東京八二一八七番

會員番號B 一〇八〇一四

會費 金 三十六圓

(別に送料六圓)

振替拂込みはすべて一圓五十錢増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十二年一月廿日印刷納本 昭和二十二年二月一日發行

浄土 第十三卷 第二號

定價金 三圓 (送料五十錢)